

アイルランド語詩二篇
「シエーマス・ヒーニーに捧ぐ」「恋に落ちる」

ヌーラ・ニゴーノル
池田寛子訳

シエーマス・ヒーニーに捧ぐ In Memoriam Seamus Heaney

大木が森の奥で倒れたならば
斯様な音が響くのか
彼が斃れた その時に
東の果てまで響いた轟音を
我らは聞いた
祖国を遠く離れていたが
直ちに その場で 知らされた
森の王が斃れたと

その昔黒髪のエヴリーンが歌ったように

我らが胸の亀裂は癒されぬ

マンスターの地の総力をもつてしても

フィン島の島の鍛冶屋が腕を振るおうとも

彼は我らの少年

輝く勇士 王者 楽師

彼の奏でる音色に鼓舞され 我らはここまで来た

約束の国をめざして

原詩出典：Nuata Ni Dhomhnaill, *Northern Lights* (Meath: Gallery Press, 2018) 96.

シエーマス・ヒーニーは二〇一三年、享年七四歳でこの世を去った。最後の言葉は死の数分前にラテン語で妻に送ったショートメッセージ、「恐れるな」(Noli timere) だったという。一九九五年のノーベル文学賞受賞によってヒーニーは、アイルランドの詩の伝統の底力を世界に知らしめることとなった。ヒーニーへの敬愛の念とその死を惜しむ気持ちだが、ニゴールノルの言葉の選択の端々に現れている。

ヒーニーの葬儀にはハリウッドの俳優たち、U2を始めとするロックスターたちも駆け付けたということである。ニゴールノルの詩はアイルランド語の哀歌の伝統を引いた格調高い仕上がりになっている。この晩歌がアイルランドの文学的伝統に連なることによって、ヒーニーはその長い歴史の中に生かされる。

重要語句に注を付け、解説に代えたい。

森の王 (Ri na Colle)

樹々の中の王であるオークの大木とヒーニーを重ね、倒れた時の衝撃の大きさを伝えている。「森の王」はアイルランドの民話に登場する妖精王の呼び名でもある。一国の支配者としての王とは違い、この世の権力や利害を超越した原理で行動する異界の住人を想像させる。

詩人ニゴーノルが意識していたのは、戦場から逃げ出し鳥として森に生きたとされる七世紀アイルランドの伝説の王、狂気のスウィーニーかもしれない。ヒーニーはスウィーニーに深い共感を覚え、古期アイルランド語のスウィーニー伝説『狂気のスヴネ』の翻訳に取り組み、十年がかりで独自のバージョンを書き上げている。ヒーニーがスウィーニーに自分を見たのは、紛争が激化する北アイルランドを逃れて南のアイルランド共和国に移住したという自身の経験から、自分と王が「エグザイル」の運命を共有していると感じたためである。

黒髪のエヴリーン (Eibhlin Dubh)

エヴリーン・ドゥヴ・ニホネル (c.1743-c.1800) という名の存在した女性のこと。彼女は一八世紀アイルランド語詩の最高傑作とされる「アート・オリーレに捧げる哀歌」を残した。伝説的な逸話によると、エヴリーンは殺された夫アート・オリーレと対面した途端、即興でこの詩を朗誦したということである。アートはカトリック信徒に対して差別的な刑罰法を無視する行動をとり、プロテスタントのエイブラハム・モリスとの対立を深めていた。暗殺を企てたのはモリスだった。ニゴーノルの詩の第二連の前半四行はエヴリーンの哀歌から取られてい

る。

マンスターの地 (Cúige Mumhan)

千年以上昔から存在した境界線に沿う形で、現在アイルランドは東のレンスター、西のコナハト、南のマンスター、北のアルスターの四つに区分されている。一一六九年のアングロ・ノルマン人の来寇まではマンスターは王国だった。現在クレア、コーク、ケリー、リムリック、ティペラリー、ウォーターフォードの六つの県で成り立っている。マンスター地方はダブリンを中心とするレンスター地方ほどイギリスの影響を受けなかった。このため独自の文化を守り、ナシヨナリズムが深く根を張ってきた地域として知られる。エヴリーンとアートはマンスター地方のコークに居を構えていた。ヒーニーはアルスター出身で、ニゴーノルはマンスターと縁が深い。

フィン島の島 (Oileán na bhFionn)

フィン人はアイルランド随一の英雄。「フィン島の島」は「アート・オリーレに捧げる哀歌」に出てくる言葉で、アイルランド島を指すものと思われる。だが慣用表現と言えるほど様々な作品や文献で使われているわけではない。古来アイルランドはしばしば女神の名で呼ばれてきた。女神は複数存在し、現在のアイルランドのアイラランド語名 *Éire* (エアラ) はその一人の名である。

輝く勇士 (Gile Mear)

このフリーズから多くの人が思い浮かべるであろう歌があり、これによってここでアイルランド全土がヒーローの死を嘆くというニュアンスが瞬時に生まれる。このことについて考えておきたい。

「輝く勇士」とは、イングランドのスチュワート王家の王子チャールズ (Prince Charles Edward Stuart, 1720-1788) の呼称の一つである。カトリック国だったアイルランドは、プロテスタント国となったイングランドによる迫害を受け、とりわけ清教徒革命で知られるオリバー・クロムウェルの侵略により大きな打撃を被った。カトリックのスチュワート家は救世主の役割を期待された。だがチャールズは一七四六年のスコットランドでの戦いで敗北し、再起できなかった。

アイルランドを象徴する女性がこの敗北を嘆くという設定で書かれた詩がある。ショーン・クララハ・マクドナル (Sean "Clarach" Mac Domhnaill, 1691-1754) による「私の悲嘆に終わりはなく」 (Bímse Buan ar Buairt Gach Ló / My Heart is Sore with Sorrow Deep) である。このタイトルは詩の冒頭部分で、エヴリーンの哀歌の「癒されぬ」胸の痛みと奇しくも響きあっている。この詩は二十世紀に入って「私の輝く勇士」 (Mo Gile Mear) のタイトルで伝統的な曲と掛け合わせた歌として再生した。チーフタンズ、メアリー・ブラック、ケルティック・ウーマンなどのアーティストによる演奏で聴くことができ、アイルランド国内外で知られる。

アイルランドの救い主という意味での「輝く勇士」と重ねられることに対しては、ヒーローは抵抗を覚えるかもしれない。北アイルランドのデリー出身のヒーローは、カトリックの少数派に属し、プロテスタントとの対立に巻き込まれざるをえなかったが、武力闘争も辞さない過激なナショナリズムとは距離を取り、微妙な立場を

保った。

詩篇「私の悲嘆に終わりはない」が生まれた頃のアイルランドにはまだ南北を分ける国境はなかった。アイルランドを象徴する女性はイギリスの支配下に置かれて苦しんでいたとされ、アイルランドの大地の嘆き、かつ民衆の嘆きを代弁するこの女性を中心に据えた数々の民謡が歌い継がれてきた。ヒーニーを「輝く勇士」呼ぶことによって、ニゴーノルはヒーニーの死を悼む気持ちが多くのアイルランド人に共有されていることを伝えようとした。この点が肝要なのであって、「輝く勇士」が本来誰だったのかを問題にする必要は特にないかもしれない。

約束の国 (Tír Tainnre)

海底や湖底に沈んで何年かに一度だけ浮上するとされる島など、この世に実在し、かつ魔法に包まれた異界でもある場所を指すアイルランド語表現は現在記録に残っているだけで十以上ある。「約束の国」はその一つである。そういった神秘の島や土地はおおよそその位置が特定されており、ゴールウェイ湾沖、ケリーの海岸沖など、アイルランド各地で目撃譚が存在する。「約束の国」は死者と生者の交わる地であり、そこではヒーニーと再会できることだろう。

恋に落ちる Timi nGra

私は恋に落ちる 秋になるといつも

フロントガラスに打ちつける 雨粒に

はるか彼方の 空と丘が接するところで

漂い揺れる かすかな光に

足元に無造作に散らばる 朽ちた木の葉

腐敗した材木の上で輪を描く 茸たち

私は恋に落ちる 冷たい土に 泥炭地に

そこに私たちのために 潜んでいるものがあるから 恋人よ

私は恋に落ちる すべての去りゆくものたちに

溝に転がり黒ずんで腐っていく じゃが芋

茎の上で錆びつくように

霜に焼けて赤く 苦く腐っていく 芽キャベツに

ねずみに齧られた アーティチョークの根

湿った砂に潜り 何も聞いていない二枚貝

地下でやすらかに眠る 種粒に

私は恋に落ちる　ほんの少しだけれど　死というものに

落ち切ってから　上向きになる

春がきて　肩で風を切って　また　前向きになる

思い通りになって　王の小道を闊歩する

そんなことは期待しない　むしろ怪しんでいる

私たちはないがしろにする　雪の上着　あの冷たい羽毛の敷布が

天の鳥の群れから　落ちてくるのに

不吉なものを見たような気がして　払いのける

太陽のにんまり顔と熱気に　すっかり欺かれて

原詩出典：Nuála Ní Dhonnaiil, *The Astrakhan Cloak* (Meath: Gallery Press, 2018) 22.

この詩はニゴノルの詩集『祝祭』(Fest) (一九九一年)を初出とし、その第一セクション「カイラツハ」(Cailléach)に収められた二七篇の詩のうち的一篇である。「カイラツハ」は冬の化身としての女神あるいは地母神であり、この世と異界の狭間に生きる山姥のような女性である。このセクションの詩はすべてこの世の「影」を見据えようとする態度に貫かれている。

詩篇「恋に落ちる」は冬の一步手前の秋の光景を軸に展開される。最初の二つの連では「私」を惹きつける寒々とした情景が克明に描き出されていく。曖昧な表現はないが、はっきりしないのは唯一、第一連で言及され

る、冷たい土や泥炭地に潜むものとは何なのか、という点であろう。一例としては第二連に出てくる「種」を考えてもよいかもしれない。芽生えてもいない種も含めて、あらゆるものが刻一刻とこの世を離れていく気配が「私」には感じられるようだ。

第三連の前半は、再生への期待を込めて滅びの情景に注目してきたわけではないことをあえて断っておこうとするような内容になっている。「恋」の対象があくまでも死であることの念押しである。寒く厳しい冬から春への推移はケルト神話の根幹にあり、これを主題にすればまったく違った詩になる。詩集『祝祭』に収められた詩篇「プリマベラ」は陰鬱な日々からの脱出を春の女神の登場として華やかに歌い上げており、冬の価値の再考に徹する詩篇「恋に落ちる」とは対の関係にある。

自然現象を綴ってきた第一、二連からの大きな飛躍を感じさせるのが、超自然の介入を暗示する第三連の「雪の上着」あの冷たい羽毛の敷布が／天の鳥の群れから落ちてくる」である。冬の訪れを死の到来と重ねるこの詩のコンテキストにおいては、雪は死の世界、この世の向こう側に属している。夏と冬の境にある秋には異界とこの世の間の往来が最も盛んになる日があり、ケルトの暦ではサウィンと呼ばれ、キリスト教では万霊節にあたる。「天の鳥」は異界からの使者なのだろう。

「天の鳥」たちから「落ちてくる」「雪の上着」あるいは「羽毛の敷布」とは、いったい何なのだろうか。「上着」と訳した現代アイルランド語の brat には「胎児の頭を覆う羊膜」の意味もある。この brat は、現代英語の方言で「前掛け」「ぼろ」、温めた牛乳の上でできる「薄皮」などを意味する brat と共通の語源を持つ。それは古英語と古期アイルランド語の両方に認められる brat である。アイルランドの聖人ブリジットのマント (brat) をめぐる有名な伝説がある。王がブリジットに彼女のマントが覆うことのできるだけの土地を与えても

よいと約束したところ、マントはたちまち拡張しはじめ、ブリジットは教会を建てるのに十分な広さの土地を得ることができた、という逸話である。bratのニュアンスは「上着」では伝わらないが、さらにニゴノルの詩のbratには生と死、この世とあの世を引き合わせる役目がある。雪や羽毛のイメージから連想すれば、この布地はどこからともなく「落ちて」(thieann) きて薄く広がり、この世をあまねく包み込むのみならず、上昇も可能なのだろう。このひんやりと柔らかい白い布に迎え入れられる時が生きとし生けるものにとつての死を意味するならば、生きるために人は、ほとんど気づかないうちにこの白いものを「払いのけ」続けなければならない。

「落ちる」という動詞は詩を通して七度出てくる。タイトルを含めて「私は恋に落ちる」(tinn) が五回繰り返されているが、忍び寄る秋に恋に「落ちる」瞬間には、あちらの世界に触れる感覚が内在している。これに対し、第三連の一行目「落ち切つてから 上向きになる」には動名詞「落ちること」(tinn) が含まれ、全体で現世における物心両面での浮き沈みが暗示されている。こちらは死に恋に落ちるといふこの詩の主題とは対比させるべき一行である。

第三連の「私」は、人をあちらの世界へと誘う白い幻影をすり抜けるように生きる「私たち」の一人でもある。詩を結ぶ一行には太陽が登場し、「私たち」がその陽気、熱気、輝きに引き寄せられ、欺かれ、惑わされながら生きることは否定されない。それでも「私」は、生きていこううちに日の光の恵みを受容するようにと積極的に呼びかけてはいない。死を見つめる詩が概して思ひ出させようとする「今を生きよ」という教訓がこの詩では二の次にされていることには留意したい。詩人は自然界で朽ちていくものたちに心奪われ、そこにたゆたう白い何かを愛おしむ。自らの死を望んでいるわけではないが恐れているわけでもない。「天の鳥」が群れなす異界は目には見えないが、地表の土をそつと払いのければ現れてくるほどすぐそばに「潜んでいる」と知っている。死に恋

に落ちる瞬間、「私」はこの世に在りながら異界を生きる。

原詩
テキスト

In Memoriam Seamus Heaney

Faoi mar a thitfeadh crann mór
i lár na foraoise an turlabhait
a dhein sé nuair a thit sé
do chualathas insa Domhan Thoir é.
Chualamairne féin an tuairt
cé go rabhamar i bhfad ó bhaile
is thuigeamar láithreach, is ar an dtoirt,
go raibh Rí na Coille ar lár.

Is faoi mar a dúirt Eibhlín Dubh fadó
is ar ár gcroí bhí cumha
ná leigheasfadh Cúige Mumhan
ná gaibhne Oileán na bhFionn.
Dob é ár mbuachaill beo é,
ár nGile Mear, ár rogha, ár bpíobaire.
Do sheinn sé suas is bhagair sinn
go dtí Tír Tairngre.

Titim i nGrá

Titim i ngrá gach aon bhliain ins an bhfómhar
leis na braonaíocha báistí ar ghloine tosaigh an chairr,
leis an solas leicideach fliúil ag dul thar fóir
na gcnoc ag íor na spéire os mo chomhair.
Le duilleoga dreoite á gcuachadh i mo shlí go cruiceach,
le muisiriúin, lúibíní díomais ar adhmaid lofa,
titim i ngrá fiú leis an gcré fhuar is an bogach
nuair a chuimhním gurb é atá á thuar dúinn fós, a stór.

Titim i ngrá le gach a bhfuil ag dul as:
leis na prátaí ag dubhadh is ag lobhadh istigh sa chlais,
leis na *Brussels sprouts* ag meirgiú ar na gais
ruaite ag an mbleaist seaca, searbh is tais.
Na rútaí airtisióc á gcreimeadh ag an luch,
na ruacain bodhar is doimhin sa ghaineamh fliuch,
na gráinní síl faoi iamh sa talamh, slán.
Titim i ngrá, beagáinín, leis an mbás.

Is ní hí an titim, ná an t-éirí aníos
san earrach – an searradh guaille, an cur chun cinn arís,
ag tabhairt faoin saol, ag máirseáil bhóithrín an rí
is measa liom, ach an t-amhras atá orm faoi.
Croithimid dínn brat sneachta, an tocht cleití
oigheartha a thiteann ó ál na n-éan neamhaí.
Caithimid uainn é, mar dhuaiceas, i gcúil an choicís,
meallta ag straois na gréine is an teas.